

# 織笠

**高**台から山田湾の丸い形を美しく見渡せる風光明媚な織笠地区は震災前、織笠川河口の北側に市街地が形成されていた。漁協では毎年、サケの稚魚の大規模な放流を行い、川には秋から冬にかけて成長した無数の親魚が遡上する。高さ10メートルに及ぶ津波は、織笠川に架かるJR山田線の鉄橋や織笠駅の駅舎、密集する住宅などをことごとく押し流し、火災も発生した。住民らは高台の織笠保育園や織笠小学校、地区のコミュニティセンターなどに駆け込んだが、逃げ遅れた100人以上が犠牲になった。



地図内の■は津波の浸水範囲

※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

死者・行方不明者	117人
震災前の人口	2,812人
全半壊家屋	522戸
被災家屋の割合	52%

## 山田中学校3年 堀合紳弥

あの日、東北地方を中心に、日本の広い地域をマグニチュード9・0の大地震がおそった。

僕たちは、帰りの短学活中で、教室にいた。いきなり大きな地鳴りと共に、教室が揺れはじめ、それが1分以上も続き、揺れも収まり切らないうちに、外に出て校庭に避難した。その後、たて続けに大きな地震が発生し、とても恐ろしかった。

その後、学校の下の方でザー、ザーと音がし、電柱が倒れていくのが見えた。先生たちの話を聞くと、「すぐ下まで津波が来ている」とのことだった。自分の家も学校のすぐ下なので、家はもうない、と思った。

同時に、大沢で働いている母は、宮古市役所前の道路工事をしている兄は、大丈夫だろうかと思った。

体育館に行き、織笠の方を見ると煙が上がっていた。体育館に来て、余震が収まらず、気温も下がり、寒さと余震に耐えていた。午後5時から6時を過ぎたころ、短時間で教室に戻り、必要な物を持って来てよいと言われた。教室に戻ると、町の方を見ると、やはり、5カ所くらい大きな煙が上がっていた。阪神大震災の時の映像を思い出した。山田もあのような感じになっている

のだろうか、と不安になった。

夜になり、みんなが集まって話をしていると、「すぐその山まで火が回っているので、山田高校に行きます」と言われた。荷物を持って学年ごとに出発した。

街の方の空を見ると、火でオレンジ色になっているのが分かった。山田高校の体育館に行った後も、余震が多発し、起きるたびに寒さや怖さで体が震えた。

次の日になると、航空自衛隊や防災航空隊のヘリで人や物資が運ばれてきた。すると、一番心配していた兄が入り口の所に来ていた。海のすぐ近くが現場だったが、山に上がっていればいな、と思っていたので、ホッとした。少し話をして、「家、ないっけぞ（ないぞ）」と言われ、「まあ、しょうがねえ」と答えた。「おかあは」と聞くと、「まだ連絡がつかない」と言われた。そうしているうちに、新潟に行っていた父が帰って来てくれた。その後は、父と兄とで各避難所を回って、母の安否確認をした。

どこにも、母の名前がなかった。父と兄に呼ばれ、車で話を聞いた。「おかあのは、半分諦めた方がいい」と言う。同時に、母の兄も行方不明になっていることを知らされた。

体育館に戻る時、消防がたくさん来ていた。小さいころから消防が好きだった僕は、本などで見ていた各都道府県の緊急消防援助隊のすごさを知っていたので、「よっぼど、すごい事になるな」と兄と話した。

発災から1週間ぐらいしてから、北浜地区のばあちゃんに会いに行った時に、初めて被害の状

態を見た。山田ではなかった。母の兄は、1カ月ほどたつたところに、津波で流されて移動していた家の中から見つけた。母は、3カ月たった6月に確認された。

僕のDNAと近い遺体があったと警察が来て、写真を見ると、3カ月間、遺体安置所に通って見ていた焼死体の写真だった。そこで父のDNAも採り、「旦那さんと遺体のDNAを足して、息子さんのDNAが出たら、この遺体はお母さんです」と言われた。それから2週間ぐらいいしてから、警察からの電話で母だったと知らされた。

合同葬儀には、県中総体で出られなかったので、出発前の朝と、帰ってきた次の日にお寺と墓に行つて拜んだ。「今までお疲れ様。ゆっくり休んで」と心の中で伝えた。

人は、どうなつてしまうか分からない。この津波で生きたくても、生きられなかった人もたくさんいる。その中で、生き残れた僕たちは、亡くなった人たちの思いを、次世代に伝えていかなければならないと思う。

僕は将来、消防士になりたいと考えている。今回の震災でもそうだったみたいに「消防が来てくれて、よかった」と言われるような消防士になりたい。今回犠牲となった人々に伝えたい。「その死を絶対無駄にはしません。次に起こり得る未曾有の災害に備えていきます」と。

だから、この命を大切に生きていこうと思っている。

「やまだの作文」第40集

## 価値観がすっかり変わった

【織笠】

2

ケアマネジャー 稲川<sup>ひさこ</sup>壽子 (65歳)

あの日は宮古の共同生活事業所で仕事でした。とてつもない地震で、矢中町にある県の消防学校で震度7の体験をした時のようで、利用者さんたちとテーブルの下に頭を入れて揺れが収まるのを待ちました。そのうち、市の公報で大津波警報が発令されたと放送になったので、すぐに宮古小学校の体育館に避難しました。皆で17人、肩を寄せ合い、持っていたあめ玉を分け合つて過ごしました。体育館は避難者が集まっていっぱいになりました。市内に大津波が来て「シートピアなあど」（観光施設）や宮古市役所に押し寄せたとの情報が入り、小学校のプールの近くまで津波が来ていました。落ち着いてくると、織笠の家に1人でいる母親のことが心配になりました。92歳の母はよたよたとしか歩けず、町の避難訓練の時でも織笠保育園まで上ったことがなく、坂の下に止まっていたので、きつと流されてしまったのではないかと考えると、申し訳ない気持ちで眠れませんでした。

翌日、自分の車は浸水し、エンジンがかからないので、職場の人に豊間根、関谷、白石と、山伝いに織笠まで送ってもらいました。龍泉寺近くの石切り場まで来ると、家という家は全て流されて道はありませんでした。屋根から屋根をよじ登り、一步一步進んで行くと、火事でパチパチ

と燃える音がして火の粉が飛んできたので、草木方面へ行こうとしたのですが、織笠川に架かる橋は全部流され、向こう岸に渡れないので、かばんを頭に乘せ、胸まで川に入って越えました。頭の上を自衛隊のヘリが旋回していました。

織笠保育園を目指して歩いていくと、保育園で同級生が私の名前を呼んでいました。「おめえ、生きていたったんだなあ。行方不明者の名簿に載っていたが」と言われました。たくさんの方が流されたことが分かり、母のことを尋ねると「保育園にはいない」と告げられ、愕然としました。それでも「織笠小学校に避難しているかもしれない」と励まされ、泣きながらお墓の引導場どうばを通って小学校に行くと、何と母は隣近所の人たちと一緒にいたのです。抱き合って喜びました。それも、父の位牌とデイサービスの着替えを入れた袋を持っており、本当に不思議でした。人は火事場のばか力が出るものだと感じました。あの時、母が流されていたら、私は悔やみながらその後の人生を歩かなければなりませんでした。母は津波を3回も経験し、地震が大きかったからとにかく逃げようと思ったと話しました。あの日、仕事が休みで家にいたら物欲のある私のこと、あれもこれも持っていこうとして、きつと逃げ遅れたと思います。「津波でんでんこ」といいますが、母も私に頼れないと思ったからこそ一人で逃げ切れたのだと思います。

地震の後は津波が来る。何も持たなくてもいいから、身一つでとにかく逃げるといふ事を後世に言い伝えていかなければならないと思います。

この津波ですっかり価値観が変わりました。土地や建物は生きている間の地球からの借り物。

物にあふれた生活が幸せだと思っていた不遜な心がよくないのです。物がなければ代用品を考え、工夫する力が出てきます。自分さえ良ければという気持ちもなくなりました。

生きていればこそ泣いたり笑ったりできます。物は失ったけれど、突然亡くなった人の気持ち（悔しさや無念さ）を大切に引き継ぎ、今日一日を大切に生きていこうと思っています。

「明日へ向かって」第2集

## 誰もが地獄に突き落とされた

【織笠】

3

昆野昭子（81歳）

忘れようにも忘れられない、あの日。悲惨な地獄を見た。

あの時、私は縫い物をしていた。何だか体がふらつくようで、グーグーだかゴーゴーという無気味な音を感じたと思ったら、大きな地震の揺れ。立とうにも立てず、揺れが収まるのを待って、手早く普段から準備してある非常用リュックと、風呂敷に包んだ毛布2人分を玄関に出した。外に出ていた主人も急ぎ足で帰って来た。

まず隣の一人暮らしのおばあさんを見に行く。親戚の車に乗り込んだのを確認して家に戻る

と、主人は壊れた物を片付けていた。私は「津波が来るのに片付けなくてもよござんす。早く薬と、荷物を持って学校に行くように」と伝える。着替えをし、食べ物を手提げ袋に詰めて両手に持ち、重いリュックを背負って外に出た。

主人は隣の母様<sup>かみ</sup>2人と立ち話をしていた。私は大声で「早く逃げねーば、津波が来やんすが」と促し、急いで歩くと、3人も後をついてきた。70段の階段を上り、下を見ると3人は半分も来ていない。2人の母様は小さな手提げ一つ、主人はリュックと手に提げた荷物で、ふうふう言っている。毛布を受け取った時はやれやれと思った。

織笠小学校の校庭では生徒たちが先生と腰を下ろし、避難していた。私たちが来た時は10人余りと避難者は少なかった。しばらくして胸のドキドキも収まり、海の方を見ると、バリバリと大きな音を立てて家や建物が押し流されてくる。眼下では車や多くの人たちが「逃げる、助けろ」の声も空しく、流されていくのが見える。あの恐ろしく荒れ狂った濁流は、ものすごい爆音と茶色の砂煙を高々と巻き上げ、一瞬にして全ての物をのみ込んだ。最愛の家族、友達、財産……。辺り一面、砂煙で何も見えなくなった。砂煙が収まった後は、ただ広々とした水面に残骸が浮き沈みしながら行ったり来たりするばかり。屋根の上で助けを求める人や、ずぶぬれになって支えられて来る人がいる。大声で泣きながらう、6人の男たちに運ばれてきたお母さんは、病院に行くこともできずに亡くなった。

あと5分早ければ助かったのに、あつという間に見えなくなった人たちのことを思うと、悲しみと悔しきで日暮れの寒さが身に染みだした。80代の自分たちのわびしき。主人はよたよたと歩き、一時はどうなるかと不安だった。

空からはちらちらと雪が落ちてきた。体育館に入ると、電気、水、食べ物もなく、ストーブも少なく、空腹も感じて寒さが増すばかり。肩を寄せ合って寝るが眠れず、夜明けを待つ時間の長さ。夜が明けて下を見れば、海の色は黒々として、辺りには残骸が広がっている。海の底からは津波にのまれた人々の叫びが聞こえてくるようで、やり場のない空しさを感ずる朝だった。

亡くなった人も、生き残った人も皆地獄に突き落とされたと思つた。「それぞれに思いを残して逝った人、それぞれに思いを背負って生きる人」。言葉では言い表せないほどの苦難に満ちた道なき道を、共にはい上がる努力をしなければならぬと思つた。しばらくは何かと不自由だったが。自衛隊の皆様をはじめ関係機関の方々から多大なる支援物資を頂き、苦しみ涙しながらも後片付けに無我夢中だった。

慰問公演では、沖繩から来た「那覇太鼓」（創作エイサーのグループ）の演奏は力強く、亡くなった人たちにみんなの祈りを乗せて届けとばかりの音が、織笠小体育館にいた私たちの心の奥底まで響き渡り、大きな感動を与えてくれた。また、山田の龍昌寺の本堂いっぱい響いた大正琴の音色も素晴らしく、亡き人々のご供養になったのではと思うと心が安らぎ、感涙した。

避難所を出て入居した仮設住宅は、こぢんまりと設備が整っていて、感謝、感謝の気持ちで手を合わせた。不自由さの中でお互いを思いやつた避難所の暮らしを振り返ると、ただ涙が流れた。

こうして今は、皆様のお情に勇気付けられながら震災から2回目のお正月を迎えることができ  
た。残り少ない人生を感謝の気持ちで忘れずに過ごし、悔いなく健康で美しく老いるよう努力し  
たいと思う。

震災で声もなく逝きし多き人魂安かれと我等は祈る  
避難所の人との交流生きがいと思い出語る心わびしき

## 震災に亡き父を思う

【織笠】

4

織笠婦人会長 沼崎敦子（67歳）

あの日、私は自宅の2階で書類を整理していました。突然の大きな揺れに驚き、思わずこたつに潜りました。揺れはそのうちに収まるかと思いましたが、激しくなるばかりでした。立てかけてあった姿見が倒れ、本箱の上にあったスチール製の書類ケースの引き出しが目の前に転んできました。テレビは突然電源が切れました。いつもならすぐテレビが地震情報、津波注意報を放送してくれるのに。

私はパニック状態になり、バッグ一つを持って階下に入り、外出していた義姉（83歳）を心配して、ただただ、おろおろしていました。そのうち、義姉が無事帰宅して、2人で織笠保育園に避難しました。保育園の坂を上る途中、T子さんにあいさつし、N子さんの車とすれ違いました。なぜあの時「早く逃げるべし！」と言わなかったのか。後々まで悔やまれてなりません。数分後に会えない方々になってしまうとは。

私と義姉と長男は保育園も土砂崩れの危険があるというので、織笠コミュニティセンターに一晚避難しました。翌朝、妻の神地区の従姉の所に行き、仮設住宅に移るまでの5カ月間お世話になりました。その間、友人、知人をはじめ全国の方、世界中の方々に温かいご支援を頂き、心から感謝しております。とりわけ婦人会の方々からは何回にもわたり支援物資を頂き、感激しました。婦人会活動をしていて仲間がいてよかったです。

私は今回の震災で、亡き父のことを強く思い起こしています。昭和23年9月16日、私の生まれた宮古市藤原は、アイオン台風により大水害に襲われました。死者89人も出ています。その中に私の母（当時29歳）と弟（生後5カ月）も含まれています。父からは「空襲で家を焼かれ再建した矢先だ」と聞いています。父は今度の震災で家族を失った方のように「毎日、藤原から津軽石方面まで妻子を探して歩いた」と言っていました。あまり思い出したくないのか詳しくは話しませんでした。「幸治（弟）を背負わせねばよかった」と口にするだけでした。父の生存中、もともとと当時の事を聞いておけばよかったと心から思っています。

現在このような状況を見るにつけ、当時の父の無念さ、悲しき、悔しさがやっと分かった気がします。30代という若さではあったものの、今のように行政からの援助とか義援金とかはあつた

のでしょうか。磯鷄<sup>そけい</sup>石崎の復興住宅から、藤原の自宅を再建した時は50歳近くになっていて、実に13年もかかりました。妻子を失い、幼い私をはじめ残された家族と生活するのに必死だったのでしょうか。

終わりに今回被災し命を失った方々に哀悼の意を捧げるとともに、亡き父へも祈りを込めて合掌したいと思います。

合掌

「明日へ向かって」第2集

## 変わり果てた町に涙

【織笠】

5

中村あづ子（54歳）

あの日、私は電力関係の仕事で陸前高田の山中にいました。

男性作業員の「おーい、地震だぞー！」の声と同時に大地震が襲い、立っていることができませんでした。生まれて初めて経験する揺れに、どうすることもできず、木の切り株にしがみつきました。収まる気配もなく揺れは続きました。班長の指示に従い、道具を片付けて車に乗って走り出した時、30分は過ぎていました。運転手の判断で、海岸の国道は通れないだろうから、内陸

へ向かい、山道を走るようになりました。車内のラジオで時々「壊滅的被害」の報道を聞きながら、「私たちの山田はどうなっているの？」と不安になってきて、車は進んでいるけれど「一秒でも早く家に着きたい」というもどかしさでいっぱいでした。

ふと、中学生の息子が学校を休んで1人で家にいたことを思い出し、「無事でいるのか？ 家はどうなっているのか？」と不安が大きくなりました。辺りが少しずつ暗くなるにつれて、雪の量も増え、本当にこの道でよかったのか心配になりましたが、もうあとには引き返すことができありません。豊間根の田名部<sup>たなぶ</sup>から関口に向かって走っている時、暗闇の空が赤く見え、山田が燃えていると直感、車内の誰もがそう思いました。

3時間かけてわが家に帰ってきました。真っ暗でしたが、息子は隣の実家に駆け込んでいて無事でした。夫と実家の父と一緒に山仕事をしていて、私より自宅に近い鶴住居<sup>うのすまい</sup>（釜石市）の山で働いていたにもかかわらず帰りが遅く、どうしてなのか分かりませんでした。2時間遅れて帰って来ました。誰もが連絡の取りようがありませんでした。翌日になって、息子夫婦や孫、親戚などを捜すため、山田高校の坂を国道側に向かって下がった時、目に見えたのは変わり果てた町の姿で、涙が止まりませんでした。時間がたつにつれて息子、嫁さん、孫、嫁さんのお母さんにも会えて喜びました。

あれから1年。あの時と同じ寒い雪が降りました。余震もまだありますが、この東日本大震災を決して忘れることなく、後世に伝えなければと誰もが思っているでしょう。助け合い、誰かの

ために一生懸命になることも経験しました。これからも誰かのために一生懸命になりたいと思っています。

「明日へ向かって」第1集

## 意識が薄れていくのを感じた

【織笠】 6

蛇石福子（57歳）

私にとって、あの津波は一生忘れることのできない、恐ろしく、つらい出来事でした。

高台上がった時、波に飛ばされて近くの家の中に4人が流されました。崩れてきたがれきに挟まれ、浮いていた冷蔵庫に押しつぶされそうになりながら、意識が薄れていくのを感じ、「このまま死んでいくのだ……」と迫り来る死の恐怖に耐えていました。私の横では、本家のおばあさんががれきの下になって亡くなっていました。

助けてあげることができなかった悔しさ……。何が起こったのか分からず、頭の中はパニック状態でした。そんないろいろな事を思い出すとつらく、涙が出てきます。私は肋骨が3本折れ、左の腿に杭が突き刺さり、宮古病院に運ばれて手術を受けました。でも、大変な思いをしたのは

自分だけではない、ほかの人たちも私以上につらい毎日を送っているのですよね。

自分は死なずに助かったし、幸い家族も皆無事だった。それが救いだったと自分に言い聞かせながら毎日を過ごしています。これから生活していくのに大変な事をいっぱい抱えていかなければなりません、少しづつ強い気持ちになって頑張っていきたいと思います。

婦人会のいろいろな方から多数の物資を頂き、ありがたく思っています。全部流されて何もなの中で本当に助かりました。会長さんをはじめ、役員の方々にはご苦勞を掛けましたが、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

「明日へ向かって」第1集

## 虫の知らせと夫の声

【織笠】 7

八木良子（65歳）

あれからもう2年半が過ぎた。私はあのころ、膝が痛くて大槌の治療院に通っていた。あの日は虫の知らせのようなものがあり、どうしても治療院に行きたくなって、夫に「行け、行け」と言われたが動かなかった。

午後、すごい地震が来た。私は92歳の義母と2人で家にいたが、2人とも足が悪く、歩くのも億劫だったので「おばあさん、2人で2階にいきましょう。津波は2階にまでは来ないだろうか

# 船越

[ Funakoshi ]

## 4

chapter 4

山田湾(写真奥)と船越湾(手前)の双方から津波が押し寄せて、ぶつかった船越地区。船越湾側の防潮堤が激しく破壊されている(3月28日午前10時19分撮影)



ら」と言った。宮古で用事を済ませて帰ってきた夫に「何をしている、早く車に乗れ！」と言われ、着の身着のまま車で織笠小学校の校庭に避難した。義母を車に乗せたまま私は外に出た。織笠小の子供たちは下校時刻で外に出た直後の地震だったので、先生の指示で学校に戻り、皆が無事だった。「もし、あの時、あと10分下校が早かったら」と思うとぞつとする。

余震もあり、校舎の中は危険なので生徒たちは校庭に集まった。避難から30分過ぎたころだろうか。フェンスの所で海を見ていた人たちが、ワーとかキャーとかいう声を上げた。津波が来たのだ。その声を聞いた子供たちのうち何人かは、恐ろしさのあまり泣いていた。

すごい波が階段の下まで来ている。ここも危ないと、学校裏の階段を上り、織笠コミュニティセンターまで避難した。コミセンでは皆が外に集まっていた。落ち着いたころ、寒くなってきて外も暗くなった。「津波は、もう大丈夫だろう」と子供たちと一緒に学校へ戻った。体育館は広くて寒いので、各教室を片付けて、それぞれ落ち着いた。私は孫と一緒にの教室にいて、届けられたいおにぎりを皆で食べた。ありがたかった。その夜は寒さで眠れなかった。

あのころを思い出すと涙が出る。あの虫の知らせと、夫が私の命を救ってくれた。いつもテレビで被災した人の姿を見ていたが、まさか自分たちがその当事者になるとは思ってもいなかった。今は少し不自由な事はあるが、落ち着いた生活を送っている。一步一步焦らずに進んでいこうと思っている。

「明日へ向かって」第2集